

# 正光寺開山四百年忌報恩記念事業だより

正光寺遠忌委員会広報誌 第3号 平成26年4月1日発行

## 『本堂解体・本尊閉眼遷座供養啓白文』

これ時、平成26年1月26日、妙見大祭の吉辰にあたり、ここに恭しく三宝の冥鑑を冀い、当山本堂再建解体供養の法会を修し奉る。

そもそも当金光山は慶長年間に至るまで、真言密宗にありしを、開山雪斎恵宗禅師が法縁に依りて、臨済宗に転宗創建されてより400年に垂とす。その間、法灯連綿、道場として衆生を化し、安心を与え給うは、現座道場南無大慈悲観世音菩薩ご照覧のもと、この大本堂あるがゆえなり。

その星霜を閲すること実に310余年。時に盛衰あり、幾度か祝融の災を受けたるも、久しく、三宝諸尊の冥護のもと、法灯増輝し、檀信和合して今に至る。然しながら風霜に晒され、腐朽は月日とともに進み、幾度か修繕を施すも、損傷甚だしく、その用に堪えざらんとするに至れり。かるがゆえに、開山400年忌を迎えるに当たり、本堂再建等々、幸いにして十方の檀信の賛助を得、件の事業を議定し、檀徒各位あるいは有縁無縁の信者はこれに応え、多額の浄財を喜捨せられり。本日ここにその機縁は熟し、堂宇解体供養の小会を修するものなり。加えて本尊観世音菩薩像もまた久しく星霜を経て、光飾は消磨し、形態は敗壞したもう。ここを以て再飾し、欠を補い、修治し奉らんと欲す。伏して冀わくは、暫く本地の法身に還帰し、また勸請の時を待ち、再び降臨を垂れ給わんことを。

当山18世 和月正澄 謹んで白す



本堂再建解体法要(上記啓白文の奏上) 平成26年1月26日

# 『新本堂』建設への歩み－1－

## 1. 仮本堂へのお引越し



## 2. 仮本堂への安置



仮本堂外部



仮本堂内部

ご先祖様も落ち着かれます



## 3. あれもこれもお引越し



ご本尊様は修復師さんに…



須弥壇は仏具屋さんにお任せ



縁側で最後のいっふく



庭木も少しだけお引越し

◇解体法要が行われた翌日からは山梨仏具さんが5～6人で来られ、さっそく天蓋や須弥壇など大きな仏具からテーブルに至るまで、およそ500点ほど自社倉庫へ運んで下さいました。

◇ご本尊様は細部まで調査して頂き、虫食いや欠損など傷みもかなり激しいため、愛知県の文化財修復師さんにしばらく預け、専門的な修復をお願いしました。本堂が出来上がったらご帰還され、末永く私たちや子孫たちをお見護り下さることでしょう。

#### 4. 旧位牌堂・旧本堂の解体



お位牌堂が⇒



こんな具合に⇒



撤去されました

#### そして本堂も…



作業は北側から入りました



西側からも…



ユンボパワーに圧倒されます



内陣の床板は手バラシ



太い梁材も虫喰いでスカスカに



更地となって藤森農園さんのハウスがよく見えます

空っぽになった建物内部から人手によって解体作業は始まり、本体解体は重機が行います。内も外も、金属・木材・石膏・ワラ・土・コンクリートなど 10 種類以上に分別されて産廃処理されました。

比較してはなりませんが、東日本大震災の被災現場のご苦勞が想起されます。

300 年の歴史に瞬く間に幕を降ろした、この 10 日間でした。

## 5. 地鎮式〔3月1日〕



ご本尊下の鎮め物に入魂



鎌入



委員長の鋤入式



柱状地盤改良工事

## 6. 基礎工事始まる



ベースW配筋と立上り鉄筋



お檀家の大衆さん まかせて安心



分厚く型枠が組まれます



生コン試験も忠実に



7. 一方、天峰建設の作業場では・・・



25年10月12日、遠忌委員会のメンバーは天峰建設の磐田豊岡作業場へ、木材検査に出かけました。出生・含水率などの問答が交わされます。



職人さんの表情は真剣そのもの



鉋をかけると表面が鏡に



平成の時代になっても、本堂屋根の形は原寸図で微調整します



佐野棟梁が虹梁の刻みをしていました

建設工事の様子は正光寺と天峰建設のホームページをご覧ください。

◇正光寺ホームページ  
[浜松 正光寺](#) 🔍 検索

◇天峰建設ホームページ  
[天峰建設](#) 🔍 検索



## 正光寺略歴と余話(第2回)

末寺8ヶ寺について考察すると、真言宗別格本山法多山尊永寺の江戸時代の名僧思玄は、羽鳥神社のすぐ北(当時の中善地村)の大清寺に居住していたという。昭和30年代までその跡地前には宝篋印塔があって現在は源長院に移設されている。思玄は法多山尊永寺の第19世智上人につき、42歳で同寺の第21世になっている。詩と画に優れ詩は梁川星巖に習っている。掛川藩のお抱え絵師村松以弘や渡辺崋山の高弟の福田半香、平井頭齋、そして歌人の小栗広伴ともたびたび書画会を開いている。その思玄の書いた幟が八幡神社にいまでも伝わっているという。

下石原(豊町下)の御嶽神社の古い棟札を見ると御嶽神社にあった海福寺(本尊、阿弥陀三尊仏は正光寺に合祀)にも社僧が住していたことがわかる。社僧が無住の時代は、大清寺の社僧がその都度派遣されて来て棟上げの祈禱をしている。

海福寺のあった御嶽神社(下石原)の御祭神は元々は蔵王権現のみで、本山は吉野の蔵王堂・金峰山寺である。修験道である。これから推察できることは、明治時代以前の神社は、秋葉神社の秋葉寺(曹洞宗)に見られるように、この羽鳥の庄の神社も社僧(別当)が住する寺と一緒に設置されていたと思われる。羽鳥の八幡神社もかつては八幡寺と呼ばれていたことがあったというが、寺が併設されていたのだろう。真言宗には醍醐寺派、智山派等修験道と結びつきが強い。江戸時代より前、正光寺は真言宗であったという。真言宗別格本山法多山尊永寺の影響下で、この地域の本寺として正光寺があり、その末寺として自光院があり、海福寺、大清寺はもとより、その他も各神社と併設された寺が末寺になっていたのではないかと推察する。



御嶽神社の棟札の最も古いのは天正16年(1588年)で、願主として当時の地頭(領主)有谷次右衛門尉の名があり、小栗九郎左衛門(開山父)、八郎左衛門(開山叔父)はもとより上石原の松島弥左衛門等の名が見える。この時は神社の禰宜と社僧の名も見える。他の棟札も結構多いのが海福寺と大清寺の社僧で、時には共同で大清寺が導師を努め海福寺が社僧を努め

ていることもある。これらのことから遅くともこの段階で小栗氏は下石原（豊町下）に移っていたことがわかる。ちなみに次に古い棟札の年代を順番に挙げると、寛永14年（1627年）、万治2年（1659年）、延宝6年（1676年）と続き全部で14枚になる。但し古い時代の棟札は享保10年（1725年）に小生の先祖（小栗嘉平次家9代前）の棟札写しによるものである（静岡県史調査団収録済）。ちなみに宝永4年（1707年）の棟札には願い主として井熊次郎衛門政重がいる。但しその棟札は奉造立八幡遷宮となっている。この井熊氏は三才（常光町の小字）の正光寺檀家の有力者であろう。三才では八幡社の信仰が厚く御嶽神社境内に八幡社の末社を合祀していたのであろう。歌人、国学者、小栗広伴の調査した御嶽神社の古文書（静岡県史調査団収録済）の中に数ある末社の中に若宮八幡がある。

ところで小生（小栗嘉平次家9代前）の先祖は棟札写しの一部を遺してくれたが、この先祖は正光寺の本山方広寺で大勢の皆さんに愛されている五百羅漢の中の1体を据えさせていただいている。深山幽谷のたたずまいの中で五百羅漢は様々なお姿で並んでいる。江戸時代宝暦年間（1751～1762年）に父親、源太郎の供養のために建立され、当時五百羅漢中93番目となっている。ちなみに正光寺は92番目である。現在は正光寺の羅漢さんは大慈閣少し下の坂道のすぐ近くにあり、周りには半僧杉が生い茂っている深山幽谷の場所である。我が先祖の羅漢さんはまだ山門に入る前の曲がり角の崖の上にある。かつては仲良く並んで修行をしていたのだろうが、さすがに260年もたつと離れ離れになったのだろうか。何年か前に方広寺奥山半僧坊御開帳があり、その時に五百羅漢の配置図が村名、氏名が展示されていたので記録したのであるが、本山資料によると五百羅漢は江戸中期宝暦年間より拙庵和尚が発起して十余年、最後の1体が明和7年に設置完了されたという。ここで正光寺に関係のある羅漢の番号と名前を記してみたい。今より本山にお参りする時は是非檀家の皆さんのご先祖さまが設けられた羅漢さんに会えるかもしれない。小生も先祖の名を羅漢さんのお背中に発見した時は、まるで260年ぶりになつかしい先祖に会えたような気持ちで感激したものである。順番からあげると42番、自光院、6世、現。102番、藤森又衛門。103番、小栗茂兵衛。179番、孫七（源太郎の甥、上記嘉平次の従兄）。210番、文七と宗八。430番、ハトリ、松島清八。431番、ハトリ、松島伊兵衛。五百羅漢さんには必ず自分のお顔や身内に似た羅漢さんがおられるとのことだが、ご自分のご先祖様に関わりのある羅漢さんを見つけられるとさらに楽しい。

（五百羅漢中の93番目の羅漢さん）



参考資料 浜松市史、無文禅師物語、静岡県歴史人物辞典

（以下次号に続く） 文責 小栗 仁

## 本堂建設に寄せて（檀家さんの声）

「感謝」 東区白鳥町 井熊 重秋

東区半田山 小栗 正木

2月上旬、寒明けとは言え酷寒の中、解体工事が始まり、いよいよ本堂の建設着工となりました。和尚様始め、遠忌委員会の方々のご努力によって、事業が順調に進められていることに心から感謝申し上げます。今後、新本堂・書院などが完成され、開山400年忌法要が無事に行われることを心より願っております。

完成なった本堂・書院で行われる新春参賀・妙見さまのお祭り、お彼岸供養、花まつり、お盆のお施餓鬼などなど年中行事を始め、ご詠歌や坐禅会などの毎月の行事なども頭に想い描きますと、今から楽しみでなりません。

また、昨年秋に副住職になられた啓眞和尚様も、大変な修行を努め上げられ、今は正光寺の作務や法務と、本山方広寺のお手伝いなど日夜幅広くご活躍のご様子に、私たちは安心と期待を頂戴しております。ご遠忌に合わせて晋山式も挙行されるとのことですので、檀家としましてもこの上なく慶ばしいことあります。今までもそうでしたように、今後もしもいつでも気軽に足を運べる、親しみやすい心の拠り所となるお寺であって欲しいと願っています。

とにかく、私たちの正光寺が新しく生まれ変わることは、ほんとうに嬉しく誇らしいことです。これからも一層ご先祖様に感謝し、色々なご縁に感謝する日々を送って参りたいと心新たにす次第です。

その時千代田の柳営は、あわただしい空気に包まれて居た。その時とは、元禄14年春3月、朝廷よりの勅使を迎え、高家筆頭吉良上野介が、播州赤穂の領主浅野内匠頭の刃傷を、受けた事であった。江戸よりの飛脚が全国に走った、所謂ゆる忠臣蔵の始まりである。折しも元禄14年（1701年）は遠州曳馬の里の正光禅寺の建立の年であり、江戸の出来事は驚きと共に、里人の知る所となった。忠臣蔵と無関係と言ひ乍ら、何故か無縁と割り切れない思いがするのは、私だけであろうか。私の父は下石原の出身で、当時38歳、東京に在住の会社員でした。1男2女の5人家族で、平凡乍ら楽しい毎日を送って居りました。今より83年前、桜散る頃の早朝、父は心臓病にて急逝しました。ほどなくして、東京より遺骨を胸に6歳の正木は、母・姉・妹と共に正光寺の御本尊の御前に、手を合わせていました。これより私と正光寺との御縁が始まったのです。御仏の御加護により、幸いにも正木が、非行に走ることなく成長し、戦中戦後の大変な時をも無事に通り、今日を迎えて居ります。御先祖代々の御加護があることはいなめません。

今回正光禅寺御本堂の改築が行われる事となり、感激もひとしおです。御住職様始め、関係者の方々の種々の御苦勞に感謝を致し、厚く御礼申し上げます。正光寺がこの地域の皆さんの御先祖様をお祭りして下さる菩提寺、又心の拠り所としての御役目を担って下さいます事は、本当に有難い事です。そして本堂が立派に建立され、末長く受けつがれ、祭られ続<sup>ころもがえ</sup>く事を切に祈ります。

『古寺の 更衣まつ 観世音』 合掌

編集後記 私は戦後生まれです。物心ついた頃のお寺は松尾恵澄さんが入ってくれました。小学校に通う頃は集合場所となり、又日曜日には夕方まで遊んでいました。庭には大きな銀杏の木、又松の木も多くありました。

時は流れ、会社を退職する頃、地震や台風の本堂は大丈夫だろうか？との声が出て参りました。その後、時に触れ話し合いを重ね、今に至りました。良き和尚さん、良き檀家さん、良き人に恵まれた良き正光寺だと自負しています。（Y・M）

発行 〒431-3101 浜松市東区豊町749 金光山 正光寺  
TEL 053-434-0800 FAX 053-443-7410  
E-mail:shokoji0800@shokoji.net  
編集 「正光寺開山400年忌報恩記念事業実行委員会」総務部会